

少年の日の悲哀

小川未明

青空文庫

三郎さぶろうはどこからか、一ぴきのかわいらしい小犬こいぬをもらつてきました。そして、その小犬こいぬをかわいがつていました。彼はかれそれにボンという名なをつけて、ボン、ボンと呼びました。

ボンは人馴ひとなれたやさしい犬いぬで、主人しゅじんの三郎さぶろうにはもとよりよくなつきましたが、まただれでも呼ぶ人ひとがあれば、その人ひとになつたのです。だから、みんなにかわいがられていました。三郎さぶろうは朝早く起あきはやきてボンを連つれて、空気くうきの新鮮しんせんなうちうちに外そとを散歩さんぽするのを楽したのしみとしていました。また、小川おがわに連つれて行って、ボン

を水みずの中なかに入れて毛けを洗あらつてやつたりして、ボンよろこを喜よろこばせるのを
も楽たのしみの一つとしていゝるのです。

三さぶろう郎ろうは、独ひとり犬いぬばかりでない猫ねこもかわいがりました。また、
小鳥ことりや、金魚きんぎょなどをもかわいがりました。なんでも小ちいさな、自じ
分ぶんより弱よわい動物どうぶつを愛あいしたのであります。

三さぶろう郎ろうの隣となりに、おばあさんが住すんでいました。そのおばあさん
は、一いっぴきの猫ねこを飼かつていました。その猫ねこは、よく三さぶろう郎ろうの家うちへ
遊あそびにきました。くると三さぶろう郎ろうは、その猫ねこを抱だいて、顔かおを付つけた
り、頭あたまをなでたりしてかわいがつてやりました。猫ねこはよくやつて
きて、三さぶろう郎ろうが大事だいじにしておいた金魚きんぎょを殺ころしたり、またお勝手かって
にあつた魚さかなを取とつたりしたことが、たびたびありました。けれど、

三 郎は猫をいじめたことがありませんでした。それは猫の性質だから、しかたがないと思つたのです。

けれど、そのおばあさんは、いじの悪いおばあさんでした。ボングがお勝手もとへゆくと、なんにもしないのに水をかけたり、手てでぶつまねをしたり、あるときは小石を拾つて投げつけたりしました。そして、夜が明けると、ばあさんは勝手もとの戸を開けて、外に出ると、

「ほんとうにしかたのない犬だ。こんなところに糞をして、あんな犬つてありやしない。」

と大きな声で、さもこちらに聞こえるようにどなるのであります。ほんとうにこのおばあさんは、自分かつてなおばあさんでした。

自分の家の猫が、近所の家へいつて魚をくわえてきたのを見ても知らぬ顔をしていました。そんなときは、

「こう、こう、こう、みや、家へ入つておいで。」

といつて、猫を家の中へ入れて、戸を閉めてしまします。

三郎は、かわいがっているボンが、ばあさんのために小石を

投げられたり水を頭からかけられたりしてきますと、今度、ばあ

さん家の猫がきたら、うんといじめてやろうと思ひました。しか

し、猫がやってきますと、いつも三郎がその猫をかわいがつて

いるものですから、すこしもおそれず、すぐに三郎のそばに、

なきながらすりよつてくるのでした。これを見ると、もう三郎

は、その猫をいじめるといふような考えがまったくなくなつてし

まいりました。そして、猫ねこの頭あたまをなでて、いつものごとくかわいがつてやったのであります。

二

ボンは、おとなしい犬いぬでありました。それにかかわらず、この犬いぬを悪わるくいったのは、この隣となりのいじの悪わるいばあさん一人ひとりではなかつたのであります。もう一軒けん近所きんじよに、たいへんに犬いぬを怖こわがる子供こどものある家うちがありました。ほかの子供こどもらは、みな犬いぬといつしよになつて遊あそんでいましたのに、その子供こどもだけは、どういふものか臆おそ病びょう者もので、犬いぬを見みると怖こわがつていたのです。そして、ボンが尾お

を振りながら、なつかしそうにその子供のそばへゆきますと、子供は犬の頭をなでてかわいがろうとせず、火のつくように泣きたって家へ駆けこむのでありました。

「どうしたんだ。」

と、びつくりしてその子供の母親が家から飛び出してきます。

すると子供は泣きじやくりをしながら、

「犬が追っかけてたんだ。」

といいます。母親はこれを聞いて、

「ほんとうに悪い犬だ。あっちへゆけ。」

といつて、おとなしくしているボンを棒でなぐったり、また、ものをぶつけるまねなどをして追うのです。

「おばさん、犬はなにもしないんですよ。」

と、三郎ははじめ他の子供がいいましても、その子供の母親は耳に入れません。なんでも犬を悪いことにしてしまつて、ボンを見るときにいじめたのであります。

ボンは隣のばあさんと、その弱虫の子供の母親から、さんざん悪くいわれました。

「三郎や、あんなに、ご近所やかましくおつしやるのだから、ボンを、だれかほしいという人があつたら、やつたらどうだい。」

と、姉や祖母が、三郎にいいました。

三郎はそこで考えました。しかしどう考えてみましても、ボ

ンにすこしの悪いところがありませんものを、そして自分がこんなにかわいがつていますものを、ほかにやらなければならぬという理由がないと思ひました。

「だって犬がなんにもしないのに、犬をしかる道理がない。これは人間のほうが、かえつて悪いのじやありませんか。僕はいくら近所でやかましくいったつて、犬が悪くないのだから、ほかへやるのはかわいそうでなりません。もしほかへやったら、どんなに悲しがつて泣くかしれません。」

と、三郎は、姉や祖母にいいました。

隣のばあさんは、犬をしかりながら、自分の家の猫はひじょうにかわいがつていました。もし夜中に外で、猫が猫とけんかでも

していますと、ばあさんは起きて出て、物干しぎおを持ってきて、
 猫がけんかをして鳴いているほうへゆきました。そして、自分の
 家の猫に向かっているほかの猫を突いたりなぐったりしたのです。
 あまりばあさんが自分かつてのものですから、三郎はある日
 のこと、隣の猫をしばらくの間隠してやりました。するとばあさ
 んは、きちがいのようになって猫を探して歩きました。

「チヨ、チヨ、チヨ、みいや。こう、こう、みいや、みいや……」

とわめきながら、四辺を歩きまわりました。そして、しまいには
 一軒一軒、よその家を訪れて、
 「家の猫はきていませんでしょうか。」

と、聞いて歩きました。三郎は、あまりばあさんが氣をもち、
 いるのを見て、はじめはおもしろうございましたが、しまいには
 不憫になつて、ついに猫を放してやりますと、ばあさんは飛びた
 つばかりに猫を抱きあげて喜んでいました。

三

ある日の朝、三郎は起きて外に出ますと、いつも喜んで駆け
 寄つてくるボンが見えませんでした。彼は不思議に思つて口笛
 を鳴らしてみました。けれど、どこからもボンの走つてくる姿を
 見いださなかつたのであります。

「ボンはどこへいったらう。」

と思つて、三郎は口にボンの名を呼びながら、あつちこつちと探して歩きました。けれど、ついにその影・形を見なかつたので、三郎は隣のばあさんが、いつか猫が見えなかつたときに、きちがいのようになって探して歩いたのを思い出して、あるときは猫を隠して悪いことをしたと後悔いたしました。

ちようどそこへ、隣のばあさんがきかかりまして、

「こんなに早く、なにをしておいでだい。」

と、ばあさんは聞きました。

「ボンが見えなくなつたので探しています。」

と、三郎がいいますと、ばあさんは、さもうれしそうな顔つき

をして、

「そうかい。もう、家の勝手口に糞をしなくて、それはいいあんばいだ。」

と、ひとり言をしてゆきすぎました。また弱虫の子供の母親は、ボンがいなくなつたと聞いて、家の外に出て、いい気味だといわぬばかりに笑つていました。

三郎は悔しくてしかたがありませんでした。しかし、いくらほうぼうを探しても、ボンはいなかつたのであります。彼は、いまごろボンは、どこにどうしているだろうと思ひました。だれに連れられていったものか、また路を迷つたものか、あるいは縛られていようか、ほかの子供や、大きな犬にいじめられていようか、

と、いろいろのことを考かんえて、その夜は眠ねられなかつたのであります。そして、幾いく日か過すぎました。その間あいだ、三さぶ郎ろうは一日いちにちとしてボンのことを忘わすれた日はなかつたのです。

それから、またしばらくたつたある日ひのことでありました。三さぶ郎ろうが我が家わがやから程ほど隔へだたつたところを歩あるいていますと、ある大おおきな屋敷やしきがありまして、その門もんの前まえを通とおりますと、門もんの中なかで子供こどもらと犬いぬとが遊あそんでいました。

三さぶ郎ろうはふとのぞきますと、なんで自分じぶんが一日いちにちも忘わすれなかつたほどにかわいがつていたボンを忘わすれることがありましよう。まさしくその犬いぬはボンでありました。どうして、こんなところに来きたろうと不ふ審しんに思おもいながら、よく見みていますと、子供こどもらは、たいへ

んにこの犬いぬをかわいがつていました。三郎さぶろうは、しばらく立たつてこのようすを見てみましたが、ボンは、いまだ三郎さぶろうを見つみけませんでした。そこで三郎さぶろうは口笛くちぶえを鳴ならしました。すると犬いぬは、この口笛くちぶえを聞ききつけて、急に飛きゆうび上あがつてこつちへ駆かけてきました。そして喜よろこんでクンクン泣ないて三郎さぶろうにすがりつきました。三郎さぶろうはまたうれしさのあまり、犬いぬを抱だき上あげて犬いぬの毛けの中なかに頬ほおをうずめました。

門もんの中なかの子供こどもらは、たいそうこの有あり様さまを見みて驚おどろきました。そして、犬いぬの後あとを追おつて門もんのところまで出でてきてみますと、もはや犬いぬが外よそをもふり向むかず三郎さぶろうについてあつちへゆきかけますので、中なかにも一人ひとりの子供こどもは、しくしく声こえをたつて泣なき出だしました。

「君、その犬をつれていつてはいけない。」

と、その中の一人が、三郎に向かつていいました。

「これは僕のかわいがつていたボンだよ。十日ばかり前に見えなくなつたのだ。いま、見つけたから、つれて帰るんだよ。」

と、三郎は答えました。

「ああ、そんなら君のところの犬だったのかい。十日ばかり前に、牛乳屋が、いい犬を拾ってきたといつてくれたのだよ。そんなら、それは君の家のだけかい……。」

といつて、子供らは残念そうにして立っていました。中にも一人の子供はやはり泣いていました。

このようすを見ますと、三郎は子供らがかわいそうに思われ

ました。あんなに犬を大事にしてかわいがってくれるなら、いつ
 そのこと、この犬を子供らにあたえようかという考えが起こつた
 のです。そして、ふたたび自分の家へつれて帰ると、隣のいじ悪
 いばあさんがまた犬をしかるばかりでなく、あの弱虫の子供の
 母親までが犬をいじめると思いました。いつそ犬を子供らにあ
 たえたほうが、かえつて犬のしあわせになるかもしれないと思
 ましたので、

「君らが犬をかわいがってくれるなら、この犬を君らにあげよう
 」。

と、三郎はいいました。

「ああ、僕らは、ほんとうにかわいがるから、どうかこの犬をお

くれよ。」

といつて、子供こどもらは意外いがいなのに、驚おどろかんばかりに喜よろこびました。そして三郎さぶろうから、その犬いぬをもらいました。独ひとり三郎さぶろうは、なごり惜おしそうにしてさびしく、一ひとり人で我わが家やの方ほうへ帰かえつていったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「少年世界」

1917（大正6）年10月

※表題は底本では、「少年『しょうねん』の日『ひ』の悲哀『ひあい』」となっています。

入力：ぷろぼの青空作業員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空作業員チーム校正班

2011年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

少年の日の悲哀

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>